

中世出雲西部における底部ケズリ土師器と京都系土師器皿

高橋 周

はじめに

出雲平野で出土する中世土師器はロクロで成形し、糸切り技法で切り離す。このため、底部に同心円状の回転糸切り痕が残る。中世の全期間を通して、形態的な変遷は認められるが、土師器の基本的な製作技法に変化はない。

ところが、出雲平野における中世後期の土師器の中には、成形切り離し後に底部ないし底部周縁¹をヘラ状工具で削る事例が散見される。このような調整を行う土師器を以下、「底部ケズリ土師器」と呼ぶ。底部ケズリ土師器は、当時の斐伊川左岸の複数の遺跡で出土し、少なくとも偶発的な造作によるものではなく、何らかの意味をもち製作されたと考えられる。

さらに注目されるのは、底部ケズリ土師器は、出雲平野だけではなく、15世紀後半から16世紀初めにかけての越中国にも見られることである（宮田1997）。また、越後国でも同時期に底部周縁をヘラケズリする土師器が出現する（品田1999）。この他、上野国や北信濃、伊予国²でも見られる。越中国や越後国などの事例もロクロ成形を基本とし、形状や年代観から京都系土師器皿を模倣したものと指摘される。後述するように、出雲平野の底部ケズリ土師器も時期的に京都系土師器皿の影響を見ることに矛盾はなく、中世後期の出雲平野における土師器の展開を知る上で、重要な資料と考える。

本稿においては、かかる観点から、底部ケズリ土師器を検討するとともに、出雲地域西部（以下、「出雲西部」）における京都系土師器皿の展開を概観し、出雲平野における底部ケズリ土師器出現の背景を考えたい。

1. 出雲平野における中世後期の土師器研究と問題の所在

出雲平野は出雲地域の中でも中世遺跡が比較的多く、土師器研究において重要な一括資料に恵まれている。古志本郷遺跡や築山遺跡、蔵小路西遺跡では貿易陶磁器を伴う資料があり、中世土師器の分類・編年案が提示されている（平石1999、間野1999、高橋2009）。こうした出雲平野の資料を中心にして、出雲地域全体の中世土師器の分類・編年案が早くから示され、廣江耕史氏や八峰興氏の研究が知られる（廣江1992・2006、八峰1998・2000・2004）。近年には、拙稿で出雲平野出土の中世土師器の分類・編年案を示した（高橋2013）。

このように、出雲平野の中世土師器の研究は次第に深められつつあるが、中世後期の様相には、なお課題が残る。特に16世紀代、中世から近世への移行期の様相は、当該期の貿易陶磁器と共に伴する良好な一括資料がないこととも相俟って、判然としない。一方で、近世初頭の土師器については、余小路遺跡の分類・編年案（伊藤2007）が示される。逆円錐台形状の器形を主とする中世土師器から、口径と底径が近似した低い筒形状となる近世初頭の土師器へ、どのような段階を経たのか、明らかにすべき課題である。

また、京都系土師器皿の研究は、広瀬や松江など出雲地域東部（以下、「出雲東部」）の出土例が議論の対象となっている。その様相は16世紀半ばに尼子氏が京都系土師器皿を導入し、17世紀初頭にかけて在地化していく流れとして理解される（中井2001、廣江2013、古賀1999・2013）。しかしながら、本稿で紹介するように、出雲西部にも京都系土師器皿は存在した。中世後期における出雲平野の在地系土師器は偏平化する傾向（高橋2013）にあり、そうした変化は京都系土師器皿が与えた影響と見ることもできるので

ある。

このように、出雲の中世土師器研究は、中世後期、特に16世紀代の土師器の様相に課題を残しており、当該期の資料と考えられる底部ケズリ土師器あるいは京都系土師器皿の検討を通して、その一端を明らかにできればと考える。

2. 底部ケズリ土師器の検討

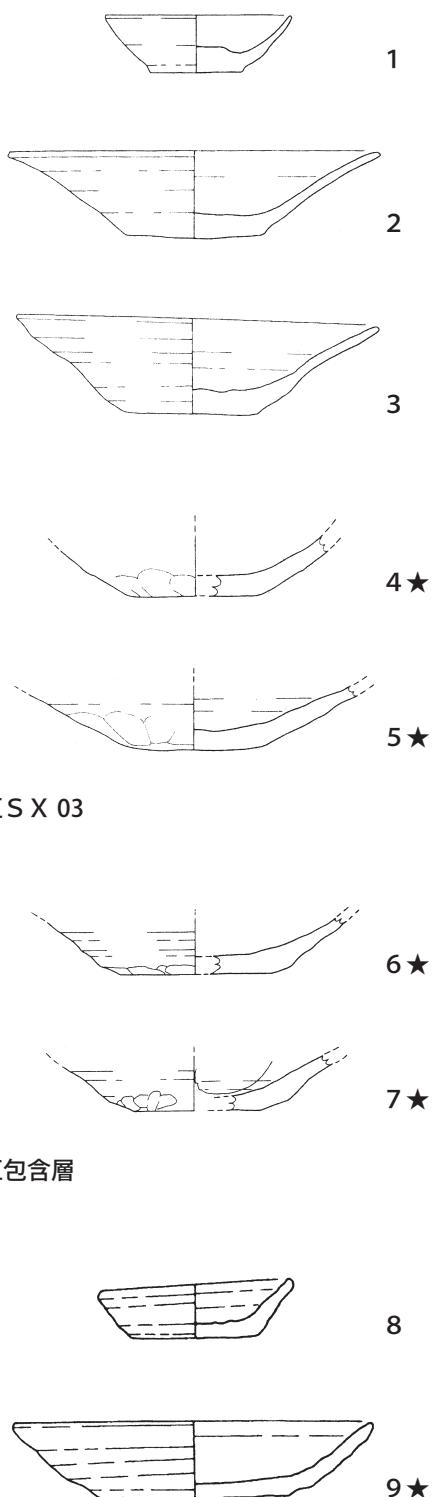
1) 底部ケズリ土師器の出土例

それでは、具体的に底部ケズリ土師器の事例を見ていきたい。類似例を含めると、出雲平野の7遺跡で17点が出土している。まず、遺跡ごとに確認したい。

古志本郷遺跡（出雲市古志町）

古志本郷遺跡は出雲平野南部の神戸川左岸に位置する。中世後期から近世にかけての遺構・遺物が数多く確認され、当該期の集落の様相を知る上で、重要な資料となっている。遺跡周辺は、出雲古志氏の本拠である。

底部ケズリ土師器は計5点出土した（平石・三代1999、勝部2001）。そのうち、C区S X03で2点出土した（図1-4・5）。ともに底部片。復元底径は4が5.0cm、5が5.2cmで、底部と底部周縁を削る。4は、底部周縁を横方向（左回り）～2cm以上の幅で直線的な面取りをする。そのため、底部の外形は多角形状になる。5は、底部周縁を4と同様に削る。底部は直線的に左回りで削る。当該資料出土のS X03は2.4×3.6mの平面三角形で、深さ50cm以上を測る土坑である。多量の土師器片や被熱痕のある粘土ブロックを含む混合層と、炭化物を含む層とが互層状になることから、土師器焼成に関わる破棄土坑と指摘される。埋土の堆積状況から2回の操業時期が想定され、当該資料は同遺構内で新相に属す土師器である。本遺跡周辺が出雲平野の底部ケズリ土師器の生産地の一つと位置付けられる遺構として注目される。



H II区 S K 105

古志本郷遺跡

★印が底部ケズリ土師器

図1 底部ケズリ土師器① (1/3)

同様の底部ケズリ土師器はD区包含層からも2点出土した（図1-6・7）。2点とも底部片。復元底径は6が6.0cm、7が4.8cm。6は底部周縁を横方向（右回り）へ2cm以上の幅で直線的に削る。底部は外周を浅く削り、中心部分に回転糸切り痕が残る。底部周縁のケズリを意識した事例である。7も底部周縁を6と同様直線的に削る。ただし、削り面は平滑ではなく山なりで、その両端にはケズリを止めた際の抉りが残る。底部にもヘラによる抉りが残る。粗雑な作りで、藤ヶ森南遺跡例（図4-23）に似る。

また、H II区SK105から、底部のみ削る土師器が1点出土した（図1-9）。口径14cm、底径7.4cm、高さ3.2cm。底部は不定方向の直線的なケズリ。底部全体を削った後、底部外周を再度削るため、中心がやや盛り上がる。内面は見込みから口縁部へ「9」字状にナデ上げる。焼成は硬質。当該資料出土の遺構は径約1mの平面円形、深さ10cm程度であるが、土師器2点と銭貨（渡来銭）10枚が見つかったことから、墓と想定される。

神門寺境内廃寺（出雲市塩冶町）

神門寺境内廃寺は神戸川右岸の微高地に立地する（川上・西尾1985）。中世神門寺は塩冶氏の菩提寺とされ、尼子氏の支配下においても、その庇護を受けた（今岡2009）。

底部ケズリ土師器は2か所で各1点が出土した（図2-10・11）。10は神門寺境内北側に残る土壘北東第14トレンチ包含層で出土した底部片。復元底径4.8cm。底部と底部周縁を削る。風化が著しく、ケズリの方向は判別できない。内面に煤が付着する。

11は神門寺本堂西側第16トレンチで確認された石列北側の落ち込みで出土した。ほぼ完存で、口径16.0cm、器高3.0cm、底径8.0cm。底部を不定方向へ直線的に削る。ただし、削りは浅く、回転糸切り痕が微かに残る。底部周縁は細

いヘラ状の工具で横方向へ0.5～1cm幅の面取りをする。焼成は硬質で、全面に煤が付着する。低い器形や底部周縁の簡略なケズリは古志本郷遺跡例（図1-9）に近い。

神門寺付近遺跡（出雲市塩冶町）

神門寺付近遺跡は、上述の神門寺境内廃寺周辺に広がる遺跡である（須賀2013）。

当該資料は神門寺の北東側の調査区9区包含層から出土した（図2-12）。口径17.4cm、底径5.4cm、器高3.6cm。底部と底部周縁を削る。底部周縁は風化のため判然としないが、底部の外形が多角形状であることから、ケズリが施された可能性が高い。

築山遺跡（出雲市上塩冶町）

築山遺跡は出雲平野南部に位置し、神戸川右岸の低位段丘に立地する。13～15世紀の方形区画溝が複数確認され、当該期の神東（塩冶）八幡宮あるいは塩冶氏に関わる施設の存在が推定される。遺跡周辺は中世塩冶氏の本拠と考えられる（原2009、原・高橋2009）。



10



11

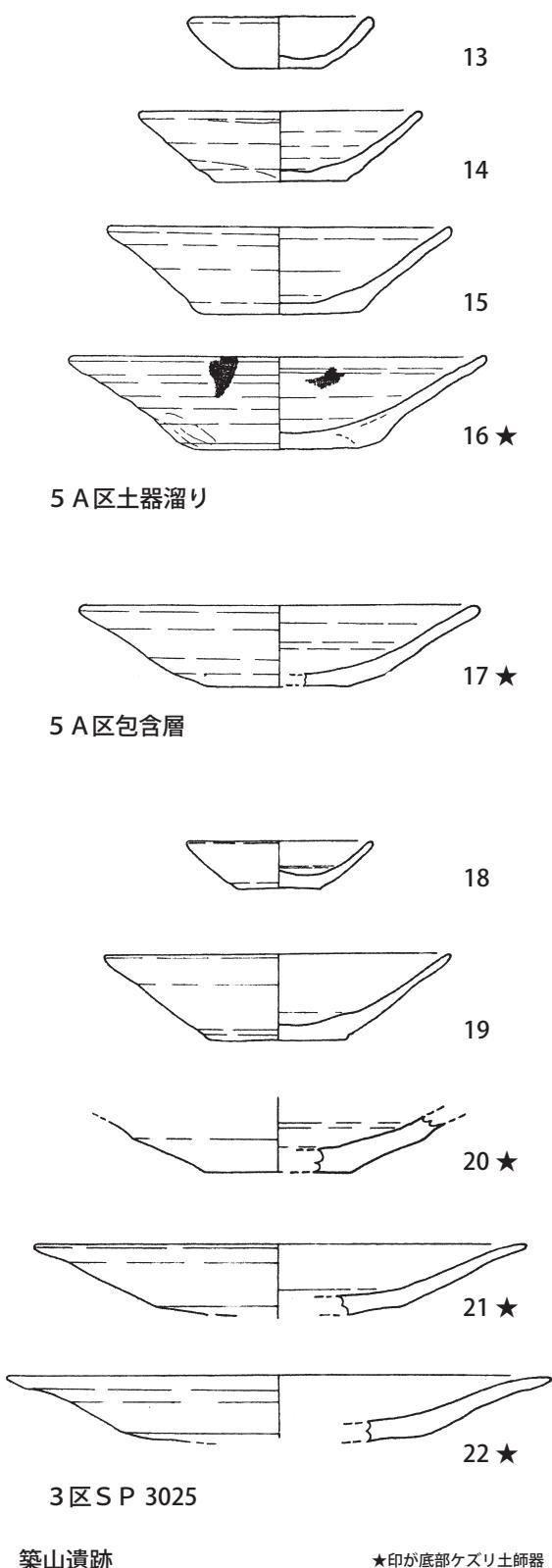
神門寺境内廃寺



12

神門寺付近遺跡

図2 底部ケズリ土師器② (1/3)



底部ケズリ土師器は計5点出土した(図3-16・17・20~22)。16は5A区の土器溜りから出土した。口径16.5cm、底径6.0cm、器高3.7cmで、底部と底部周縁を削る。底部周縁を横方向(右回り)へ細かな単位で幅0.7~1.0cm程度削る。そのため、底部の外形は円形に近い。底部は半分程度を浅く削り、糸切り痕が残る。内面は、回転ナデののち見込みにナデを施す。当該資料は一辺約30mの方形区画溝北側で確認された15点以上の土器溜りから出土した。埋納坑などの遺構は確認されないが、出土状況から一括性のあるものと考える。これらの土師器は、口径7~8cm、11~12cm、14cm前後、15~16cmの4法量に分かれる。その中で、底部ケズリ土師器は最大径の土師器である。

また、土器溜り周辺の包含層から1点出土した(17)。口径15.8cm、底径5.6cm、器高3.3cm。底部と底部周縁を削る。底部周縁を横方向(右回り)へ2cm以上の幅で直線的に削る。底部は丁寧に削り、糸切り痕を確認できない。

3区では、20~22が直径40cmのピットSP 3025から一括で出土した。20は底部片で、復元底径5.8cm。底部と底部周縁を削る。底部周縁を横方向(左回り)へ幅3cm以上で直線的に大きく削り、底部周縁に明瞭な稜ができる。底部も左回りで直線的に削る。内面は見込みにナデもしくは指頭圧痕が認められる。21・22は口縁部片、底部周縁を2cm以上の幅で大きく削る。口縁端部を外反させ開く器形で、周辺地域に類例はない。口径は21が19.5cm、22が21.6cm。ピット内からは底部ケズリ土師器3点とともに、糸切り痕をもつ在地系土師器2点と土師質火鉢片が出土した。在地系土師器は口径7.4cm(18)、13.6cm(19)で、多法量の構成かつ大法量の底部ケズリ土師器を伴うことは5A区土器溜りと同様である。

図3 底部ケズリ土師器③ (1/3)

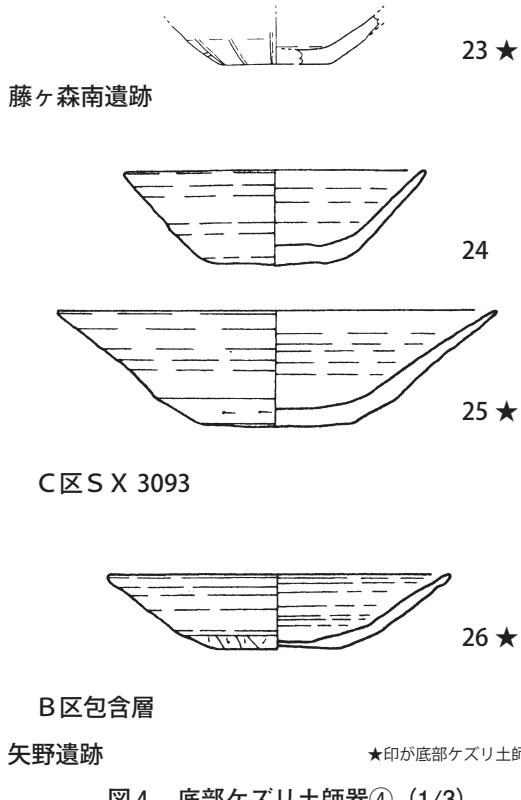


図4 底部ケズリ土師器④ (1/3)

藤ヶ森南遺跡（出雲市今市町）

藤ヶ森南遺跡は出雲平野南部に位置し、神戸川右岸の微高地上に立地する。中世後期の溝跡のほかは遺構がなく、当該期の遺跡の性格は判然としない（米田1999）。

底部ケズリ土師器（図4-23）は包含層から1点出土した。底部片で、復元底径は4.2cm。底部と底部周縁を削る。底部周縁を横方向（右回り）へ2cm程度の幅で細かな単位で削る。ケズリ面は平滑ではなく山なりを呈し、ケズリを止めた際の抉りが残る。この特徴は古志本郷遺跡出土例（図1-7）と同様である。底部は丁寧に削り、糸切り痕を確認できない。

矢野遺跡（出雲市矢野町）

矢野遺跡は出雲平野中央に位置し、近世初頭までは西流する斐伊川の近傍であった。中世から近世にかけての多数の遺構・遺物が確認された集落跡で、底部ケズリ土師器出土の遺跡とし

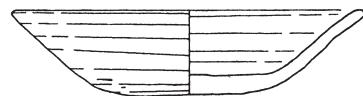


図5 蔵小路西遺跡出土土師器 (1/3)

ては最も北にある（坂本2010）。

底部ケズリ土師器は2点出土した（図4-25・26）。25はC区S X3093で出土した。口径17.2cm、底径5.8cm、器高4.6cm。底部と底部周縁を削る。底部周縁を横方向へ幅2～2.5cmで直線的に大きく削り、底部の外形は多角形状となる。内面見込みに環状の凸線が認められるが、底部を手持ちで削る際に生じたものと推測される。当該資料出土の遺構は、一辺1.1m、深さ0.2mの平面方形で、人骨片が認められることから、墓と考えられる。糸切り痕をもつ在地系土師器1点（24）と共に伴する。

また、B区包含層から1点出土した（図4-26）。口径13.2cm、底径4.8cm、器高3.0cmで、底部と底部周縁を削る。底部周縁を放射状に幅0.7～1.0cm程度で削る。底部は丁寧に直線的な削りが施され、糸切り痕を確認できない。焼成が硬質で、器形は京都系土師器皿に似る。

蔵小路西遺跡（出雲市渡橋町）

上記の底部ケズリ土師器と類似の調整を施す土師器があるので、ここで紹介する。

蔵小路西遺跡は出雲平野中央に位置する。12世紀後半から15世紀前半にかけて機能した方形居館跡と位置付けられ、中世朝山氏の居館跡と推測される（間野1999）。

当該資料は、B2区墓3から出土した（図5）。口径13.8cm、底径5.0cm、器高3.3cm。回転糸切り後に、底部周縁を指でナデて押さえる。口縁端部はやや外反気味となる。北宋銭6枚が共伴する。指頭による底部周縁の調整であるが、底部に丸みをもたせる同様の効果を狙ったもので

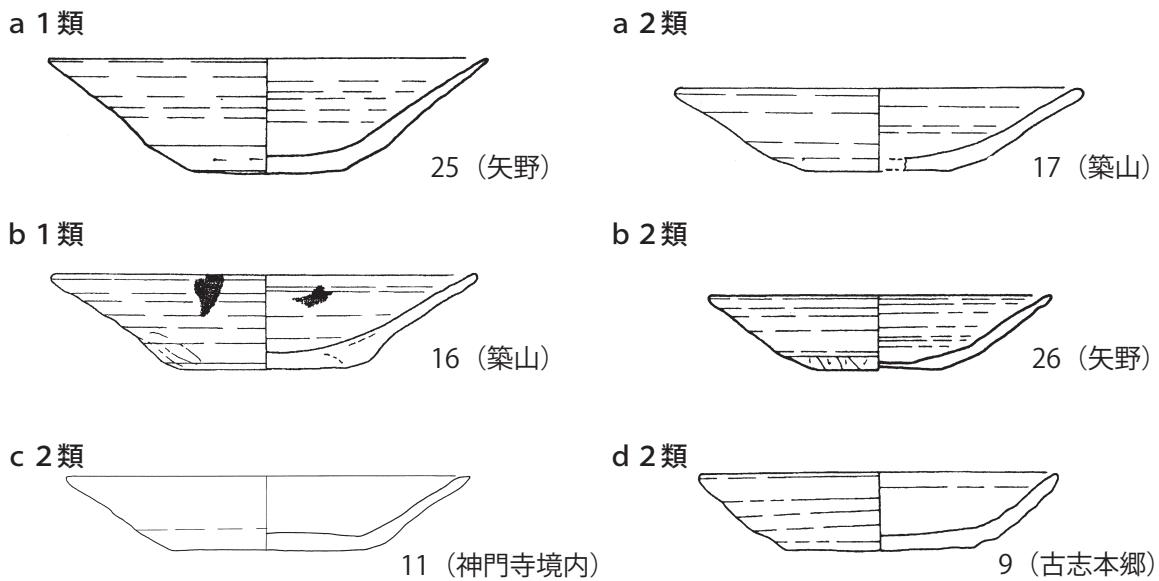


図6 底部ケズリ土師器の分類試案 (1/3)

あろう。報文は、墓3を居館廃絶後の15世紀後半から16世紀前半に営まれたと推定する。

2) 底部ケズリ土師器の分類

前節では出雲平野の7遺跡17点の底部ケズリ土師器の出土例（類似例を含む）を見てきた。ここでは、底部ケズリおよび器形の特徴から、底部ケズリ土師器の分類を試みる。出土例のうち、完形もしくは完形に復元可能な資料は8点で、分類するためには十分な数とは言えないが、以下に試案を示したい。

まず、底部周縁のケズリ幅から、次のように分類できる。以下のケズリ幅の数値は各個体の平均値をとる。

- a 底部周縁のケズリ幅1.5cm以上
- b 底部周縁のケズリ幅0.5cm以上1.5cm未満
- c 底部周縁のケズリ幅0.5cm未満
- d 底部周縁は削らない（底部のみ削る）

出土例を上記の基準に合わせると、a類10点(4・5・6・7・17・20・21・22・23・25)、b類4点(10・12・16・26)、c類1点(11)、d類1

点(9)となる。a～c類ともにケズリ方向は横ケズリが基本で、a類は大きなケズリ幅で直線的に削るため、底部周縁に明瞭な稜をなす。一方、b・c類は鈍い稜をなすか、稜をなさない。

また、底部ケズリ土師器は器高の上でも分類でき、器高3.6cm以上を1類、3.6cm未満を2類とする。

上記の分類をふまえると、図6のようにまとめることができる。底部周縁のケズリ幅が大きいa類は、形態的に口縁端部を外反させる特徴をもつ。³一方で、b類以下は口縁端部を直線的にまとめ、d2類では内湾気味となる。また、a・b類とc・d類とでは口径と底径の比（底径／口径）が異なり、a・b類が0.3～0.4であるのに対し、c・d類は0.5前後となる。すなわち、a・b類は逆円錐台形状、b・c類は低い筒形に近い形状になる。

以上のように、底部周縁のケズリ幅と器高を基準に分類試案を示した。調整の差異は工人間の癖による可能性があるとしても、ケズリ幅は器高ないし形態と概ね対応関係にあり、分類の基準として有効と考える。

このような底部ケズリ土師器の形態の差異は、ある程度の時期差に起因するものと考えられる。出雲平野の中世土師器は次第に扁平化する傾向（高橋2013）があり、かかる観点からすると、a・b類からc・d類へという大まかな流れを捉えることができよう。

3) 底部ケズリ土師器の時期について

それでは、底部ケズリ土師器の時期について考えてみたい。

まず、a類の時期を検討する上で参考となるのが、古志本郷遺跡S X03出土例（4・5）である。先掲分類a類に相当し、古志本郷分類（平石1999）では杯D-3類に位置付けられる。報文において杯D-3類は古志本郷編年IV期とされ、16世紀前半の年代觀が与えられるが、共伴の陶磁器からして15世紀後半まで遡る可能性もある⁴。したがって、a類は15世紀後半～16世紀前半に相当すると考える。

一方で、d類の古志本郷遺跡出土例（9）は土坑墓で北宋錢と共に伴する。また、井原遺跡の土坑墓（SK01（A9グリッド））でも、古志本郷例（9）と類似した糸切り痕をもつ在地系土師器（図7）が北宋錢と共に伴する。すなわち、d類は、墓に副葬された六道錢が北宋錢から寛永通宝へと切り替わる17世紀前半が下限となろう（鈴木1999）。

このようにみると、底部ケズリ土師器は15世紀後半から17世紀前半にかけての出雲平野で使用されたとみることができる。

4) 底部ケズリ土師器の意義

それでは、底部ケズリ土師器はどのような意義を有する土器であったのだろうか。

初現期の形態と位置付けたa類の特徴は、底部と底部周縁を削ることによって底部を丸く見せることである。a類には糸切り痕を明瞭に残すもの（古志本郷遺跡出土例（7））もあり、底部



図7 井原遺跡出土土師器（1/3）

周縁を削ることが第一義であったと考える。さらに、ユビオサエで底部周縁を丸くする蔵小路西遺跡出土例（27）からすると、ケズリは丸くみせる手段の一つであったとみられる。

それでは、なぜ底部周縁を丸くする調整が行われたのであろうか。ここで想起されるのが、京都産土師器皿（図8）の影響である。すなわち、京都産土師器皿は手づくね成形を基本とし、底部に切り離し痕ではなく、底部周縁は丸みをもち、ユビオサエによる鈍い稜をなす。出雲の底部ケズリ土師器が指向したのは、この底部の形態であったのではなかろうか。実際、京都産土師器の模倣は各地で行われており、これを伊野氏がまとめている。つまり、氏が提起した京都産土師器皿模倣の諸段階では、手づくね成形による模倣を1次～3次模倣型とし、⁵ロクロ成形で調整手法の一部を模倣するものを4次模倣型、同様に在地系とは異なる器形・色調を示すものを5次模倣型とした（伊野1998）。つまり、出雲の底部ケズリ土師器は、当該期の京都産（系）土師器皿の特徴を成形後の二次的加工により模倣したもので、4・5次模倣型の広義の京都系土師器皿と捉えることができる。

また、築山遺跡出土例（13～16／18～22）のように、3～4法量の構成で在地系（回転糸切り）土師器とセット関係にあることも注目される。特に底部ケズリ土師器は在地系土師器に対して口径が大きく、このような傾向は、越中國の井口城跡（富山県南砺市）で出土した15世紀後半の土師器にも見られる（宮田1997）。すなわち、口径8cm, 10～12cm, 14～15cm, 18cmの在地系（ロクロ）土師器のうち14cm以上のものが底部ケズリ土師器なのである。また、15世

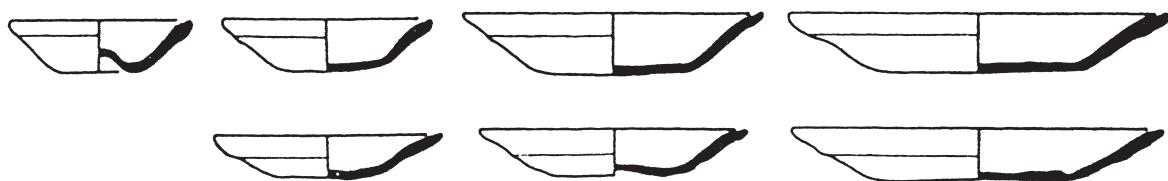


図8 15世紀後半～16世紀初めの京都産土師器（1/3、伊野1995）

紀に近畿北部、北陸、西美濃地域で出現した京都系土師器皿も、在地系土師器に対し口径が大きくなる傾向にある（服部2003）。このような法量的観点からしても、出雲平野の底部ケズリ土師器は15世紀の他地域における京都系土師器皿の傾向と合致するのである。

服部実喜氏は、当時の武家社会を慣例・作法という形で大きく規制した室町幕府の儀礼、とりわけ土器を式正の器とする式三献以下の飲食・饗應儀礼（以下、「武家儀礼」）の普及が京都系土師器皿受容の前提になったとする。ただし、式正の器は法量分化した土器であり、15世紀の各地域の京都系土師器皿は、法量分化が未発達であることから武家儀礼受容を契機として導入された可能性は低く、在地系土器の多法量化によってその受容に対応したとする（服部2003）。つまり、底部ケズリ土師器は、武家儀礼受容に伴う土師器多法量化の中で出現した広義の京都系土師器皿と捉えられる。

一方で、b 2類の矢野遺跡出土例（26）は器壁も薄く、京都系土師器皿とよく似た器形をする。a類に比べ、扁平であることから、16世紀代以降の資料である可能性が高い。その時期には、出雲地域で手づくね成形による京都系土師器皿が展開しており、（26）は土師器皿の正確な情報に基づき成形調整された可能性を示唆する資料と考える。扁平な器形であるc・d類についても同様に考えられ、16世紀代以降の底部ケズリ土師器は、出雲地域で展開した京都系土師器皿の影響により形態を変容させた可能性を

指摘できる。

次章では、出雲西部における京都系土師器皿の分布を確認し、その展開を概観したい。

3. 出雲西部における京都系土師器皿の検討

1) 京都系土師器皿の出土例

京都系土師器皿とは、京都で生産された手づくね成形の土師器皿を模倣したものである。16世紀代に戦国大名の主導下で本格的な模倣生産が開始され、室町幕府（將軍家）に連なる当主の権威を顯示し、自己の領国支配の正統性を具現する儀礼装置の一つとして導入された（服部2003）。導入時期は各地域で異なるが、出雲地域は16世紀半ばに尼子氏により導入される。1552（天文21）年、尼子晴久が中国六か国守護職となり、室町幕府体制の中で安定した地位を得たことと重なる。尼子氏滅亡後も在地化が著しく進み、少なくとも17世紀後半までは生産された（中井2001）。

出雲地域の京都系土師器皿については、月山富田城跡や松江城下町遺跡などを中心とする出雲東部の事例が検討の対象とされてきた（中井2001、廣江2013）。しかし、出雲西部でも、京都系土師器皿は少なからず出土している。本章では、出雲西部の京都系土師器皿の出土例を紹介し、検討を進めたい。なお、京都系土師器皿の出雲西部への展開を検討するため、宍道湖南岸の来待・宍道地区の事例についてもあわせて紹介する。

ア 北山山系周辺⁷

鹿藏山遺跡（出雲市大社町杵築南）

鹿藏山遺跡は、出雲大社付近から南に広がる微高地（大社砂丘）上に立地する。1962（昭和37）年、耕作中に在地系土師器69点とともに京都系土師器皿12点がまとまって発見された（石原2002）。土師器は伏せて、積み重ねられた状態で見つかったとされる。土師器の多くには梵字が記され、その間に銭貨（宋錢）が挟まれていた。

当該資料12点（図9-1～12）は、口径8.2～9.3cm, 10.0cm, 13～13.5cm, 14.0cm, 15.0cmの4法量。器壁は4～5mm程度。丸底の1～7は右回りに口縁部内面を横ナデする。平底の9～12は口縁部内面を横ナデし、再び見込み端部を細くナデる。色調は淡黄色（2.5Y8/4-7/4）で、内外面に黒斑をもつ。

器形や調整の特徴などから、富田城二の丸跡出土資料に近く、16世紀後半の資料と考える。

修理免本郷遺跡（出雲市大社町修理免）

修理免本郷遺跡は出雲平野北西部、北山山系から流れる小河川の扇状地の端部にあたる沖積低地に立地する。1967（昭和42）年の土地改良工事中に多くの遺物が発見され、京都系土師器皿もその一つである。出土地点は不明で、多くの土器が遺跡の西側で見つかったとされる（景山2002）。本遺跡で出土した京都系土師器は3点（図9-17～19）。色調や胎土、焼成からして、一括のものである可能性が高い。

17・18は口径各7.5cm, 7.3cm, 器壁4～5mm程度、19は口径12.1cm, 器壁3mm。17は成形後に、内面を見込み中央から右回りにナデる。また、口縁端部を5mm程度の幅で横ナデする。色調はにぶい橙色（7.5YR7/3）で、焼成は硬質。18は17と同様に見込み中央から右回りにナデる。その後、見込み中央を「6」字状にナデる。また、口縁端部を横ナデする。色調は灰白色

（10YR8/1）で、一部ににぶい橙色（7.5YR7/3）。焼成は硬質。19は成形後、口縁部を横ナデしたのち、見込みに直線的なナデを施す。口縁部の横ナデに伴い、見込み端部が幅3mm程度くぼみ、圈線状になる。また、口縁端部を1.5cm幅で横ナデする。色調は灰白色（10YR8/1）もしくは、にぶい黄橙色（10YR7/2）で、焼成は硬質。外面に円形の被熱痕が残り、重ね焼きによる焼成が行われたとみられる。

本資料は、平底タイプの19が薄手であることや器形、調整の特徴などから、富田城本丸もしくは二の丸跡出土資料に近く、16世紀半ばから後半の資料と考える。

南灘遺跡（出雲市小津町）

南灘遺跡は北山山系の北東部、十六島湾に流れる小津川左岸山裾の大宮許豆神社境内地内にある。本遺跡では、京都系土師器皿が、長径39.0cm、深さ約8cmの平面橢円形の土坑から見つかった。土坑の底に玉石を敷き、その上に土師器皿を置いて二段目からは伏せた状態で積み重ね、一番上に銅錢一枚と小柄一本が置かれていたとされる（西尾・原2011）。土師器皿を伏せて埋納する所作は、鹿藏山遺跡と共通する。

出土した京都系土師器皿11点（図9-20～30）は同様の器形で、口径11～12cm、器高2.1～2.6cmの法量におさまる。器壁は4～6mmと厚手。口縁端部を横ナデし、見込みは、①見込み端部を浅く横ナデし、ナデ上げが口縁部中央で途切れるもの、②見込み端部を浅く横ナデするが、ナデ上げはしないもの、③見込み端部を多角形状に一回もしくは複数度ナデ回すものといった3つのパターンの調整が認められる。色調はにぶい黄橙色（10YR7/2-7/3）と浅黄橙色（10YR8/3）を呈するものに分かれる。

器形や調整の特徴からして、松江城二の丸跡出土の京都系土師器皿に近く、17世紀前半の資料と考える。

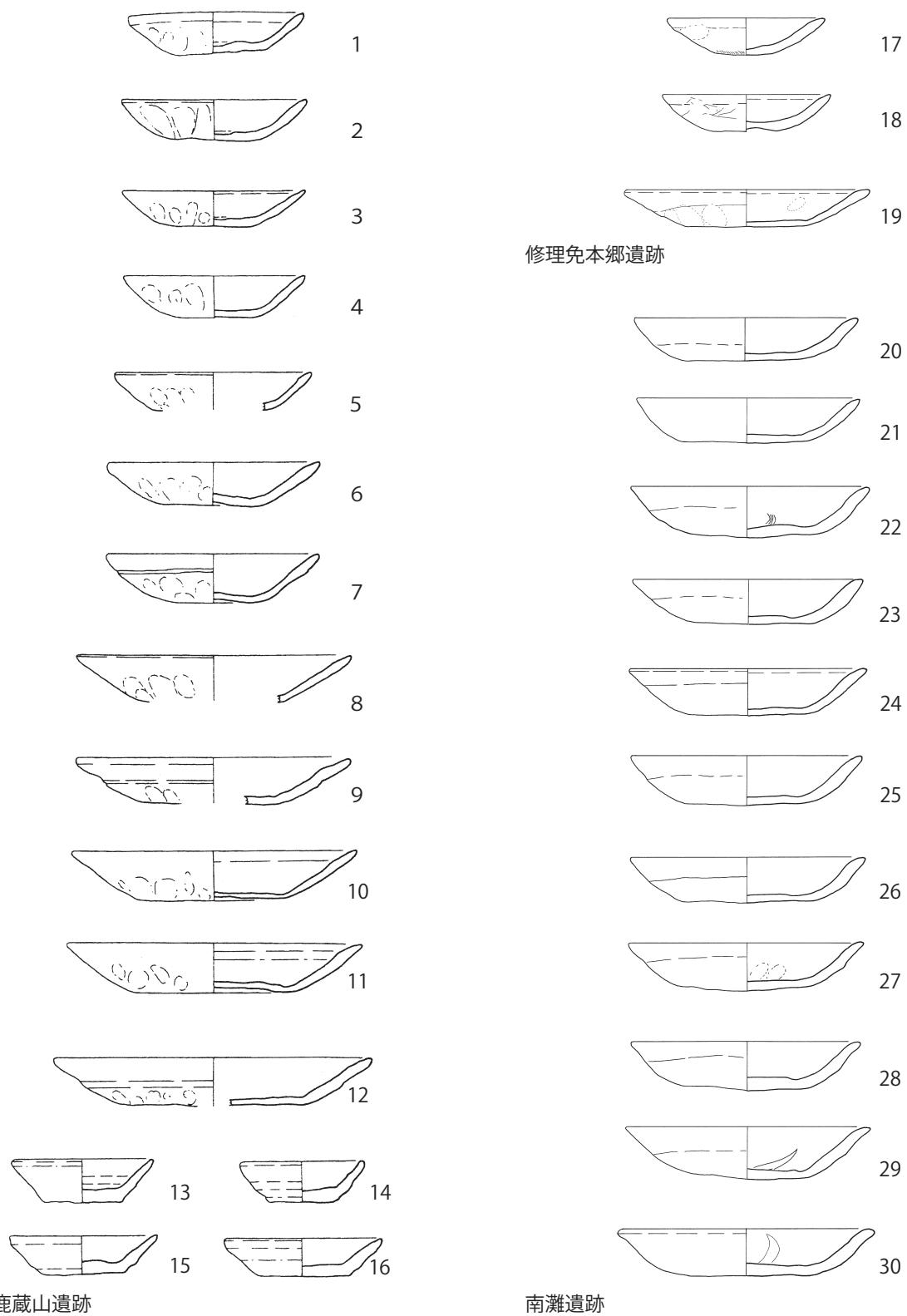


図9 出雲西部の京都系土師器皿① (1/3)

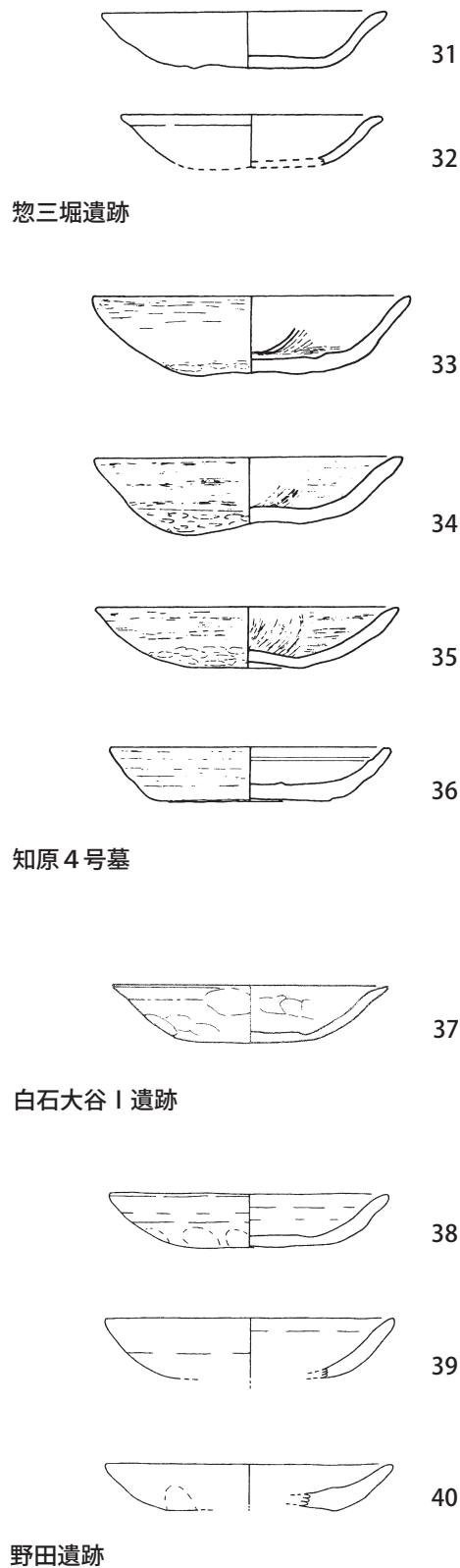


図10 出雲西部の京都系土師器皿② (1/3)

なお、小片のため図示しないが、青木遺跡（出雲市東林木町）の包含層からも2点出土した。

青木遺跡は出雲平野北東部、北山山系から流れる小河川の扇状地に立地する。遺跡周辺は鎌倉時代から戦国時代まで林木荘として知られ、本遺跡でも同時期の遺構・遺物が確認された（伊藤・東森2004）。京都系土師器皿は、いずれも口縁部片。復元口径は14.0cmと11.3cm。一片は赤色塗彩された可能性がある。富田城跡出土の京都系土師器皿にも赤色塗彩の可能性がある資料があり、その関連が注目される⁸。

イ 宍道湖南岸～斐伊川右岸

惣三堀遺跡（松江市宍道町東来待）

惣三堀遺跡は宍道湖に注ぐ鏡川上流域の尾根西側斜面に立地する（川原・東森ほか2002）。長さ220cm、深さ30cmの平面橢円形の土坑から、木炭片と人骨片とともに京都系土師器皿が2点（図10-31・32）出土した。

31は、口径11.8cm、器高2.3cm、器壁4～5mm程度。見込みに直線的なナデを施した後、口縁部に右回りの横ナデ、その後、見込み端に強いナデを施す。口縁端部のナデは、明瞭には認められない。色調は灰白色～浅黄橙色（10YR8/2～8/3）。32は口縁部の小片。復元口径11cm。風化のため、調整は不明。口縁端部に浅いナデを施し、外反させる。ユビオサエによる成形痕から、京都系土師器皿と考えられる。胎土、色調ともに31と同じ。本資料は器形からして、17世紀前半以降の資料と考える。

知原4号墓（松江市宍道町東来待）

知原遺跡群は宍道湖に注ぐ来待川左岸の低丘陵上に立地する。同遺跡群で中世末から近世初めの古墓が2基見つかった（山本・西尾ほか1999）。その一つ、知原4号墓で京都系土師器皿3点が確認された。同遺構は一片140cmの平面方形、深さ120cm。鉄釘が24本以上出土し、

木棺墓と考えられる。人骨は顎骨のみで、副葬品として京都系土師器皿（図10-33～35）、在地系土師器皿（図10-36）、鐸形銅製品、北宋錢5枚が見つかった。

当該資料は口径12～12.7cm、器高2.4～3cm、器壁6mm程度。調整は、口縁端部を横ナデし、見込み端部に右回りのナデを施す。33・34のナデ上げは口縁部中央で途切れる。また、34・35は底部からの押圧で見込みがふくらむ。器形や調整の特徴、北宋錢の共伴などから、17世紀前半の資料と考える。

白石大谷I遺跡（松江市宍道町白石）

白石大谷I遺跡は、宍道湖に注ぐ同道川の左岸の丘陵中腹に立地する。京都系土師器皿は包含層から1点出土した（川原・東森ほか2002）。

当該資料（図12-37）は、口径11.6cm、器高2.1cm、器壁5mm前後。風化のため、調整は判然としないが、口縁端部外面と口縁部内面にナデが認められる。また、見込み端部を強くナデ、圈線をつくる。ただし、ひと息でナデ回すのではなく、何か所か止めながらナデで圈線をつくる。ナデ上げは認められるが、口縁端部まで及ぶものかは判然としない。色調は浅黄橙色ないしにぶい黄橙色（10YR8/4～10YR7/4）。

器形や調整の特徴からして、岡田山古墳出土の京都系土師器皿に近く、16世紀後半の資料と考える。

野田遺跡（松江市宍道町佐々布）⁹

野田遺跡は、宍道湖岸から約4.5km南方の標高約115～125m程の丘陵上に位置する（川原・錦田2001）。旧斐川町と旧加茂町との境に近い。本遺跡では、京都系土師器皿が2点出土した（図10-38・39）。

38はSK03から出土した。同遺構は1.35m×0.6mの平面長方形の土坑で、深さ最大0.25m。北宋錢を含む錢貨を伴うことから、墓と考えら

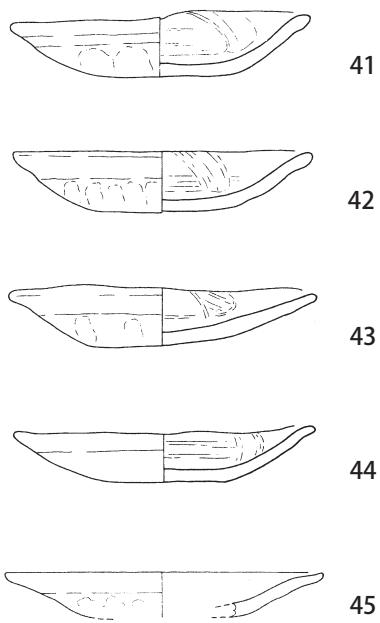
れる。当該資料（38）は口径11.1cm、器高2.2cm、器壁6mm程度。風化が激しく調整は判然としない。器形から、17世紀前半以降の資料と考える。また、包含層からも京都系土師器皿の口縁部片（39）が出土した。復元口径11.6cm、器高2.4cm。時期は17世紀以降か。

ウ 斐伊川中流域

湯後遺跡（雲南市加茂町延野）

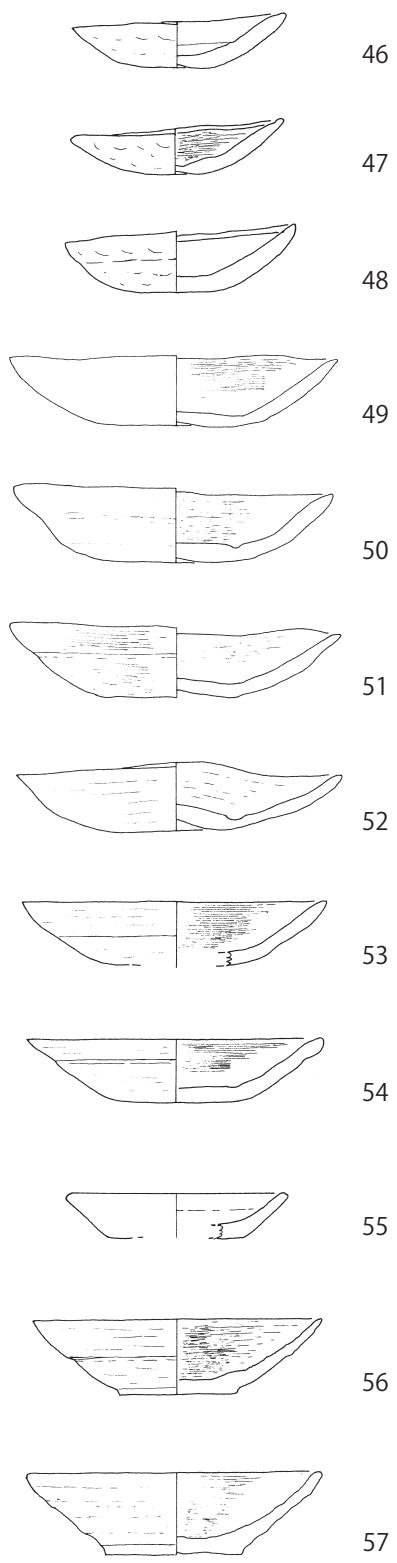
湯後遺跡は、斐伊川の支流である赤川周辺の平野に臨む丘陵の南西斜面に立地する（田原ほか2001）。

京都系土師器皿は計5点出土した（図14-41～45）。そのうち、4点（41～44）が包含層から石鉢と隣接して見つかった。関連する遺構は確認されていないが、岡田山1号墳墳裾の土坑で石鉢と京都系土師器皿が共伴する例があり、本例も一括して埋められた可能性がある。包含層出土4点の法量は口径11.6～12.0cm、器高2.2～2.3cm、器壁5mm程度。見込みに直線的なナ



湯後遺跡

図11 出雲西部の京都系土師器皿③ (1/3)



清水荒神塚

55～57 在地系土師器

図12 出雲西部の京都系土師器皿④ (1/3)

デを施した後、口縁部を右回りにナデる。止めながらナデをし、その痕跡が多角形状になるものもある。その後、再び見込み端を「2」字状にナデ上げ、口縁端部にも強いナデを施す。見込み端部には口縁部のナデに伴う圈線状の凸線がつく。色調は浅黄橙色あるいは黄橙色(10YR8/3-8/4～10YR8/6)。また、性格不明の土坑SK04より京都系土師器皿が1点(45)出土する。復元口径12.4cm。口縁部の小片で調整の詳細は判然としないが、口縁端部の強いナデは確認できる。

器形や調整の特徴からして、16世紀後半の資料と考えられる。

清水荒神塚（雲南市三刀屋町上殿河内）

清水荒神塚は、斐伊川の支流三刀屋川左岸の狭隘な河岸段丘上に立地する。同地の私有地において、地権者が和鏡、土師器を発見し、また、そこから4m離れた地点で鉄鍋、刀片、土師器を発見した。詳細な出土状況は不明で、土師器も一括保管され、出土地点が弁別できない状況である(杉原・永塚1986)。問題のある資料群と言わざるを得ないが、その土師器の半数が京都系土師器皿とみられる点は注目される。本稿では、清水荒神塚出土資料として紹介する。

京都系土師器皿は少なくとも11点(図12-46～54)。口径8～9cm、器高1.5cmと口径11.5～13cm、器高2cm前後の2法量に分かれる。前者(46～48)は口縁端部内面に沈線をもつものがあり、外面には指頭圧痕が残る。報文や写真からすると、内面のナデ上げは施されていないか。器壁は6～8mm。後者(49～52)は、見込みが底部からの押圧でふくらみ、見込み端部に明瞭な圈線をなす。器壁は5mm程度。

以上の諸特徴から、本資料は16世紀後半から17世紀初めにかけてのものと考える。

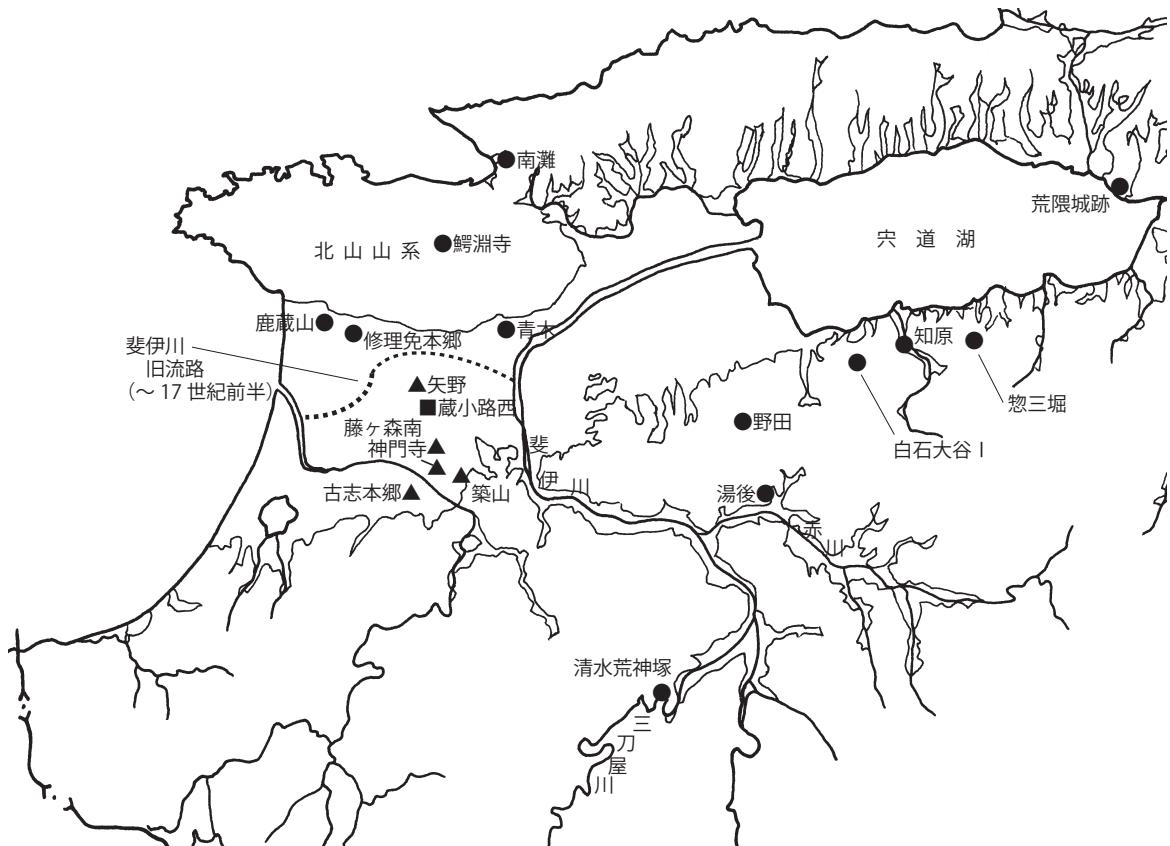


図13 出雲西部における底部ケズリ土師器と京都系土師器皿の分布
 ▲底部ケズリ土師器 ■底部オサエ土師器 ●京都系土師器皿

4. 出雲西部における底部ケズリ土師器と京都系土師器皿

最後に、前章で検討した出雲西部における京都系土師器皿の様相を概観した上で、底部ケズリ土師器との関係を考えたい。

従来、出雲地域の京都系土師器皿は東部の様相を中心に議論が行われてきた。ところが、西部とその周辺においても分布することを確認できた。中世後期の遺跡の発掘事例が少ないとからすると、かなりの程度展開した可能性すら生じる。さらに、その年代も、16世紀半ばないし後半に相当する資料を確認でき、尼子氏による京都系土師器皿導入後、程なくして出雲西部へ波及した可能性が高いことも明らかとなつた。出雲東部では、尼子氏滅亡後も京都系土師器皿は在地化し生産され続けたが、出雲西部でも確認される17世紀以降の京都系土師器皿は、出雲東部から流入した可能性が考えられよう。出雲西部とその周辺における京都系土師器皿の

出土例を見ると、墓もしくは祭祀に伴うものが大半を占める。本来武家儀礼の器である京都系土師器皿は、次第に在地化し葬送など種々の儀礼に伴う土師器として用いられたのであろう。

一方、図13に示したように、斐伊川左岸の出雲平野では、同時期の京都系土師器皿は未だ確認されていない。それに対して、斐伊川左岸に分布するのが、底部ケズリ土師器なのである。その出土事例は、墓もしくは祭祀に伴うものが多く、京都系土師器皿と同様の用途の器であったと考えられる。第2章で指摘したように、底部ケズリ土師器が先行すると考えられるが、同時並存した時期もあったとみられる。17世紀前半までは斐伊川が西流し、斐伊川が分布の境となっている。

こうした両者の並存の背景には、土師器の流通圏の問題がまず考えられる。しかしながら、当該期の出土陶磁器の様相からして、斐伊川を境とする流通圏の存在は見出し難い¹⁰。

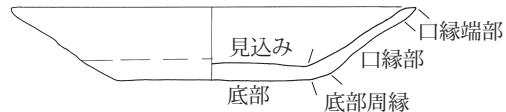
他方、京都系土師器皿がもつ儀礼的な性格か

らすると、底部ケズリ土師器は斐伊川左岸に広がる塩治郷・古志郷ないし朝山郷、すなわち塩治氏の支配領域ないし影響下¹¹に分布することが注目される。塩治氏は斐伊川左岸の塩治郷を本拠とし、室町期の塩治氏惣領は幕府奉公衆として在京し將軍に近侍する存在であった（長谷川1997）。幕府における武家儀礼の確立は永享から長禄・寛正年間（1429～1464）とされ（二木1999），当該期にも塩治氏は將軍に近侍していたのである。塩治氏は在京しながら、一族・家臣が塩治郷およびその周辺における基盤の確保・拡大に努めたことが知られ、15世紀後半の土師器多法量化ないし底部ケズリ土師器出現は当該期の塩治氏における京と塩治郷のネットワークを背景にしたものであった可能性を指摘できよう。他地域の例と同様、当初は塩治氏の居館を中心と使用され、次第に在地化したのであろう。当該期の塩治氏の支配は、出雲平野の郷村における強い地域的紐帶の上部権力として存続したとされ、16世紀半ば以降、塩治氏滅亡後の尼子氏や毛利氏による支配も基本的には塩治氏の支配を継承したものであった（長谷川1997）。こうした地域的紐帶が背景となり、塩治氏滅亡後も尼子氏導入の京都系土師器皿の影響を形態的に受けながら、儀礼の器は出雲平野における伝統的な底部ケズリ土師器が採用され続けたのではなかろうか。

末筆ながら、本稿を作成するに際して、資料調査の便宜を図って頂いた島根県埋蔵文化財調査センター東森晋氏、安来市教育委員会舟木聰氏に記して謝意を申し上げる次第である。

【註】

¹ 本稿における土師器部位の名称については、外面底部を「底部」、底部と口縁部の間を「底部周縁」、内面底部を「見込み」とする。下図、参照。



² 伊予国河野氏の本城である湯築城跡では、口縁部下半に圧痕を加えるものや糸切り痕が残る底部全面ないし周縁を削り取るものが出土する。これらの出現期は16世紀前半とされ、京都系土師器皿の模倣と位置付けられている（柴田2000）。

³ 底部ケズリa類の完形資料は築山遺跡出土例（17）と矢野遺跡出土例（25）のみであるが、古志本郷遺跡S X 03出土例（4・5）の底部片についても、共伴する同規格の土師器（2・3）が口縁端部を外反させており、同様の口縁形態が推測される。

⁴ 古志本郷遺跡において、杯D-3類とSX03で共伴する杯D-2類がC区SK24で青磁碗（上田B-IV類・15世紀後半～16世紀）、備前焼擂鉢（乗岡5b期・15世紀第4四半期）と共に出土する。また、同遺跡A区SK10では杯D-2類が古瀬戸筒形香炉（後期IV型式古段階・15世紀第2四半期）と共に出土しており、15世紀後半まで遡る可能性もある。

⁵ 伊野氏は京都産土師器皿生産者の直接的な指導による模倣生産を1次模倣型、形態の一部や器厚が異なるものを2次模倣型、実測図ではっきり見分けがつくものを3次模倣型とした（伊野1998）。

⁶ 多法量の在地系土師器の中で採用された大法量の京都系土師器皿には特別な用途を想定できるが、具体的な用途については今後の課題としたい。

⁷ 未報告のため、本稿ではふれないが、北山山中の鰐淵寺で大量の京都系土師器皿が出土している。

⁸ 安来市教育委員会舟木聰氏のご教示による。

⁹ 報文ではSX03出土の土師器（40）も京都系土師器とするが、底部に静止糸切り痕を微かに確認でき、京都系模倣の在地系土師器と言い得る。同遺構は最大径0.9mの平面不定形を呈する炭化土と焼土の浅い堆積痕で、焚火の跡と推定されることから、葬送儀礼に伴う遺構と考えられる。当該資料（40）は復元口径11.6cm、器高1.8cm。調整は風化が激しく、不明な部分が多い。遺構上層の炭化土から出土した。

¹⁰ 矢野遺跡出土の近世陶磁器の分析では、17世紀前半に遺物量のピークがあるとする。その背景には、領国経済の中心が杵築から松江へ移行したことや斐伊川の流路変更で奥出雲と日本海とを結ぶ河川交通上の利点が失われたことがあると指摘される（阿部2010）。つまり、斐伊川は経済の幹線となり得ても、

境となることは考え難い。

¹¹ 中世塩治郷は、現在の出雲市塩治町・上塩治町・今市町・大津町・荻原町・高岡町・荒茅町・東蘭町・西蘭町・外蘭町・大社町北荒木・同中荒木に及ぶ。また、中世朝山郷は幕府御料所として、代官をつとめる塩治氏の事実上の支配下にあった。当時の朝山

郷は、現在の出雲市松寄下町・姫原町・小山町・平野町・大社町入南などが相当する（長谷川 1997）。つまり、斐伊川左岸のほとんどは塩治郷と朝山郷である。また、古志郷を治める古志氏は塩治氏との間に婚姻関係を含む緊密な結びつきを形成していた。

【参考文献】

- 阿部賢治 2010「矢野遺跡出土の近世陶磁」『矢野遺跡（自然科学分析・考察編）』新内藤川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、島根県出雲県土整備事務所・出雲市教育委員会、167—178頁
- 伊藤 智 2007「土師質土器（皿）の分類」『余小路遺跡・小畠遺跡』一般国道9号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書8、国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会、84—85頁
- 伊野近富 1995「土師器皿」『概説中世の土器・陶磁器』、中世土器研究会
- 伊野近富 1998「中世前期の京都系土師器の伝播と受容」『中近世土器の基礎研究』X III、日本中世土器研究会
- 今岡 清 2009「塩治の神社寺院・文化財・民俗・伝承」『出雲塩治誌』出雲塩治誌刊行委員会
- 古賀信幸 1999「中國地方の京都系土師器皿－戦国期の資料を中心として－」『中世土器の基礎研究』X IV、中世土器研究会
- 古賀信幸 2013「西国の城館跡から出土する京都系土師器について－京都系土師器の出現期とその背景－」『尼子氏の特質と興亡史に関わる比較研究』、島根県古代文化センター、75—86頁
- 柴田圭子 2000「出土遺物からみた湯築城跡」『湯築城跡 第四分冊』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター、95—131頁
- 品田高志 1999「越後における中世後期の土師器皿－京都系土師器第2波の流入と展開－」『中近世土器の基礎研究』X IV、中世土器研究会、5—36頁
- 鈴木公雄 1999「出土六道鏡」『出土鏡貨の研究』東京大学出版会、101—164頁
- 高橋 周 2009「D中世 土師質土器の分類」『築山遺跡III』県道今市古志線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、出雲市教育委員会、160—165頁
- 高橋 周 2013「出雲平野における中世土師器の様相」『山陰中世土器研究1－西尾克己さん還暦記念論集－』、山陰中世土器検討会、5—20頁
- 中井淳史 2001「土師器生産体制変容の一齣－中世末期出雲東部地域を中心に－」『中世土器研究論集－中世土器研究会20周年記念論集』日本中世土器研究会
- 二木謙一 1999『中世武家の作法』吉川弘文館
- 長谷川博史 1997「中世後期の塩治氏と出雲平野－「富家文書」に見る地域社会の諸様相－」『富家文書』古代文化叢書3、島根県古代文化センター、165—213頁
- 服部実喜 2003「かわらけ」小野正敏・萩原三雄編『戦国時代の考古学』
- 平石 充 1999「中・近世の土師質土器について」『古志本郷遺跡I』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VI、308—315頁
- 廣江耕史 1992「島根県における中世土器」『松江考古』第8号
- 廣江耕史 2006「出雲の土器様相」『山陰における中世前期の様相－伯耆・出雲を中心として－』第5回山陰中世土器検討会資料集
- 廣江耕史 2013「出雲地域東部の京都系土師器皿の様相について」『尼子氏の特質と興亡史に関わる比較研究』、島根県古代文化センター、55—74頁
- 間野大丞 1999「遺物の編年試案」『蔵小路西遺跡』一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2、建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会、290—294頁
- 宮田進一 1997「越中国における土師器の編年」『中近世の北陸－考古学が語る社会史－』、北陸中世土器研究会
- 八峰 興 1998「山陰における中世土器の変遷について」『中近世土器の基礎研究』X III
- 八峰 興 2000「山陰における平安時代の土器・陶磁器について」『中近世土器の基礎研究』X V

八峰 興 2004 「山陰の中世土器に関する覚書」『中近世土器の基礎研究』 X VIII

【報告書（図版出典）】

- 石原 聰 2002 「鹿蔵山経塚」『大社町史 史料編（民俗・考古資料）』、大社町
- 伊藤 智・東森 晋 2004 『青木遺跡（中近世編）』国道431号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1、島根県教育委員会
- 景山真二 2002 「修理免本郷遺跡」『大社町史 史料編（民俗・考古資料）』、大社町
- 勝部智明 2001 『古志本郷遺跡Ⅱ』斐川放水路建設予定地内発掘調査報告書11、島根県教育委員会
- 川上稔・西尾克己 1985 『神門寺境内廃寺』、出雲市教育委員会
- 川原和人・錦田剛志 2001 『荒畠遺跡・ラント遺跡・野田遺跡』中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内遺跡発掘調査報告書11、日本道路公団中国支社・島根県教育委員会
- 川原和人・東森晋ほか 2002 『白石大谷Ⅰ遺跡、惣三堀遺跡、掘田ヶ谷遺跡、地蔵院遺跡、熊谷遺跡』中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書7、島根県教育委員会
- 坂本豊治 2010 『矢野遺跡』新内藤川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、出雲市の文化財報告10、島根県出雲県土整備事務所・出雲市教育委員会
- 須賀照隆 2013 『神門寺付近遺跡Ⅲ・高西遺跡』出雲都市計画道路医大前新町線3工区道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、出雲市の文化財報告23、出雲市教育委員会
- 杉原清一・永塚久守 1986 『殿河内遺跡発掘調査報告書』、三刀屋町教育委員会田原淳史ほか2001 『湯の奥遺跡、登安寺遺跡、湯後遺跡、土井・砂遺跡』中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12、日本道路公団中国支社・島根県教育委員会
- 西尾克己・原俊二 2011 「先史時代－旧石器・縄文・弥生・古墳時代」『出雲北浜誌』北浜自治協会
- 原 俊二 2009 『築山遺跡Ⅲ』県道今市古志線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、出雲市の文化財報告5、出雲市教育委員会
- 原 俊二・高橋誠二 2009 『築山遺跡Ⅳ』県道今市古志線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、出雲市の文化財報告6、出雲市教育委員会
- 平石 充・三代貴史 1999 『古志本郷遺跡Ⅰ』斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書6、島根県教育委員会
- 間野大丞 1999 『蔵小路西遺跡』一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告2、建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会
- 山本清・西尾克己ほか 1999 「宍道・知原遺跡群とその性格」『宍道町歴史叢書4』、宍道町教育委員会、15～38頁
- 米田美江子ほか 1999 『藤ヶ森南遺跡』出雲郵便局移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、出雲市教育委員会